

口 羽 益 生  
坪 内 良 博 編  
前 田 成 文

## 『マレー農村の研究』

東南アジア研究双書12 創文社  
1976年 6+8+483ページ

### I

戦後、英国を初めとしてアメリカ、オーストラリア等の欧米の学者（主として文化人類学または地理学者）の手によってマレー農村のモノグラフがいくつか発表されてきたが、日本では最近まで若干の論文が散見される程度でその成果はごく限られているといつてよい。これは一つには日本人学者の研究関心が主としてフィリピン、インドネシア、タイやインドシナ半島など他の東南アジア諸国に向けられていたことによるものであるが、京都大学東南アジア研究センター（1962年）、アジア経済研究所（1958年）の設立以来、次第にマレー農村社会の研究論文も発表されるようになってきた。東南アジア研究センターは1964年にすでにマレー農村の調査研究に着手したが、本書は特に1968年から72年にかけてマラヤ大学の協力のもとで同センターの文化人類学、社会学専攻の若手スタッフを中心として行なわれたマレー稲作農村に関する共同実態調査プロジェクトの成果をまとめたものである。おそらく日本人学者の手によるまとまったマレー農村研究の書としては戦前・戦後を通じて初めての試みといつてよいであろう。また本書は同センターの現時点でのマレー農村研究の一応の集大成といつてよく、その研究段階を窺うための格好の研究書といえよう。

さて、本書の構成から述べるとまず「プロローグ」でマレー稲作農村の平均像とその特質を描出したあと、第1部から第3部までケダー、クランタン、マラカ各州のそれぞれタイプの異なる三つの稲作農村の実態調査の報告に費やされており、この部分が本書の中心を構成している。そして第4部では上記稲作村の調査に協力した土壌、灌漑、稲作技術等の各分野の専門家の短い論文が付け加えられており、最後に「エピローグ——反省と展望」という構成になっている。なお第4部は内容が評者の専門外なため書評対象としてはこれを割愛した。

### II

「第1部、ケダー州の稲作農村パダンラン村」は同州北部の低湿沿岸地域に位置しているが、戦前の同地域への入植は水路も構築されておらず農民にとって苛酷なものであった。しかし最近ではムダ河灌漑計画の実施によって周辺地一帯の農村、農業、農民が急速な変貌を遂げつつあるという。この報告は典型的なケダー農村であるパダンラン村の実態を「A. 村の立地条件」、「B. 家族と親族」、「C. 水稻耕作と農民の経済」、「D. 村の宗教と組織」の四つの章に分けて論じたものである。

「B. 家族と親族」ではマレー農村社会に見られる双系制親族組織の諸特徴が豊富な事例で説明されており得るところが多い。しかし「C」と「D」の両章には評者のマレー農村の調査経験と解釈とは多少くいちがう点がある。まず「C」章の内容を述べると、ここでは血縁的な地主・小作関係の比率が高いこと、従来の伝統的な水田耕作技術体系が二期作の導入によって灌漑農法、新品種、トラクター等が採用され大きく変容されつつあること、また農家家計のあり方が経営規模、兼業種、家内労働力の大小によって著しく異なることなどの実態が描かれている。そのなかで注目される点の一つは流通過程や農民金融における華人商人の吸着性がこれまで通説とされているのと異なり、決して激しいものではないと主張していることであろう。この点はマレーシアの農村地域の華人商人資本の機能と役割を評価するうえできわめて示唆的である。ただこの章で気になるのは小作令（1955年、The Padi Cultivators Ordinance No. 9）に関する叙述である（91ページ）。筆者はこの法律成立の由来を「米の不作によって、小作争議が頻発したためできたもので……」と説明しているが、評者がこれまでの調査研究（『マレーシアにおける小作令（1955年）成立の背景に関するノート』（『アジアにおける土地政策』アジア経済研究所所内資料 調査研究部 No. 48—9 1973年 第6章）で展開した、政府支持米価切り下げを原因とみる説とは論を異にしている。問題は独立直前のマレーシア農村社会のあり方をどう解釈するかという重要な論点について筆者が上記のような明確な推論を打ち出しながら、その根拠を明示していないことである。少なくとも筆者の立場を補強する意味からも小作争議の頻発を示す公式文書や統計数字の出典を提示してほしかった。

「D. 村の宗教と組織」では調査村の村落社会組織と

変貌しつつある農民の宗教的世界観の様相を取扱っている。たとえばイスラム教育が村の子弟に対して熱心に行なわれながらも、富裕層の価値意識は次第に世俗教育＝現世利益の方向に強く傾斜しつつあると考察している。しかしここで最も興味を引くのは村の伝統的な社会組織と政治との関係についてもつぎのような指摘を行なっていることである。パダンラン村には古くから什器講や葬式講集団、それに戦後導入された農業協同組合等の組織があるが、これら組織が与党 (UMNO—マレー統一国民組織) と野党 (PAS—汎マラヤ・イスラム政党) によって村民の政治的把握に利用され、その結果組織の分裂、重複化現象が起こり与党支持派 (慣習法指向派) と野党支持派 (イスラム指向派) に村民がわかれ対立していると論じている。こうした指摘は確かに独立後、村落の自治組織や農業協同組織が政治過程にまきこまれ、変質していく様相を理解するうえで重要かつ有効でありケダ州の農村調査で同じような現象を見た経験のある評者にとって賛成できることが多い。しかし村民の政治的色分けに関して野党支持派＝イスラム指向派という図式はあり得ても与党支持派＝慣習法指向派と規定している点は納得できない。もともとマレーシアでは歴史的に慣習法のうえにイスラムが導入されてきたが、農民の価値意識のなかでは両者は矛盾なく存在し対立するものではなく、慣習法指向派とイスラム指向派というような二分法で農民の政治意識を分類しにくいのではないかと思う。

「第2部、クランタンの零細農村ガロック」村はマレー半島東海岸側のクランタン州を貫流するクランタン川沿いに位置しており稲作と煙草の連作およびゴム栽培を主生業とする零細農家によって形成されているという点でパダンラン村とは状況を異にしている。しかし「B. 土地と居住」、「D. 結婚・離婚・家族」では双系的な家族組織の問題を取扱っており、第1部と重なるところが多い。この報告書のなかではガロック村の社会構造の実態を述べている「F. 村落の組織とリーダーシップ」と「G. 変動と適応」の両章が評者にとって得るところ大きかった。「F」での論点は一つはガロック村が村落固有の確立した社会的枠組や自治組織をもたないという点で共同性の弱い組織であるということと、もう一点は均分相続の慣行が大土地所有と結びついた村の富裕・有力者層の形成を阻害しているため、村落全体をカバーする強力なリーダーシップが生じにくい事情にあるということの2点である。この2点はガロック村のみならずマレー農村一般にみられる特徴でありマレー村落社会の特質

を理解するうえで重要な視点であろう。「G」では村落でのイスラム教育機関である寄宿宗教塾 (pondok) が近代的な世俗教育の導入とともにその機能と実態がどう変化しつつあるかが考察され、全体としてガロック村の社会構造が急速な変動と適応の過程に直面している様子がヴィヴィッドに描写されている。ただ寄宿宗教塾の調査資料は貴重なものであるだけにもう少し詳しくその実態・内容を紹介してほしい。

「第3部、マラカの出稼ぎ農村ブキッペゴ村」は土着マレー人ではなくインドネシアのブギス人によって19世紀に開拓された集村であり、経済的にも稲作やゴム栽培の依存が低く、家計の多くを出稼ぎに頼っているのが上記2カ村と比較した場合の特徴である。「C. 経済」の章ではこうした稲作依存度の低さと有利な裏作の欠如およびその裏がえしとしての農民の遠隔地出稼ぎ (たとえばクリスマス島)、賃労働者としての流出の実態がよくとらえられている。また「D. 宗教」と「E. リーダーシップ」は宗教と政治・行政の分析を通じて調査村の村落共同体としてのまとまり、つまり統一性の側面を浮彫りする試みがなされているが、この部分は調査資料を十分に生かしきれず必ずしも試みは成功しているとはいえない。確かに重要人物の個人的系譜を丹念に調べあげ、また農民の宗教生活、価値意識を細かく観察し全体が一つの貴重な資料にはなっているが、そこで作業が中断してしまった感じをうける。換言すれば宗教や政治・行政が現実のまとまりのない村落社会にある一定の共同体としての統一性を付与する機能があることはわかるが、その統一性＝まとまりの内容なり特質をさらに豊富な資料を用いて抽出する作業が残されているといえよう。

### III

以上がマレー稲作村に関する三つの実態調査報告へのコメントであるが、つぎにこれらの報告の事実と分析を基礎としてマレー稲作村の平均像を描き出し、本書の総論部分となっている「プロローグ」と「エピローグ」の要点をまとめ、さらに若干のコメントを付け加えたい。

まず第1に指摘しておきたいのはマレーシアの稲作村落社会の特質を理解するうえで稲作地帯の自然条件をかなり重要視していることである。マレーシアの主要稲作地帯は河川が蛇行しながら緩傾斜をなして流れている沿岸低平部や河岸段丘上に開けているため、日本やジャワの場合と異なり水田のための供排水条件のコントロールがきわめて困難であり、稲作圃場が全くの天水耕田にな

っている。その結果、農村地域では水利組織が発達せず村落の村落共同体の性格を弱いものにしてしまうと主張する。そしてこうした叙述はさらにマレー村落社会がその構造において「排他性」と「組織性」が稀薄であるという認識とつながってくる。もちろん「マレー人の村の構造や社会的諸特徴の中核を規定しているのは自然ではない」(457ページ)と一方では自然決定論の弊に落ち込むことを慎重に避けているが、全体としてはやはり「マレー農村の共同体の性格の弱さはマラヤの自然と水稲作の性格にもかかわっている側面を持つものであることは否定できない」(456ページ)といった主張が貫かれている。

つぎに宗教に関して言うと、イスラムはマレー社会全体の結合に大きな役割を演じているが村落社会においては必ずしも強固な地縁組織を形成するのに役立っているとはいえないととらえていることに注目する必要がある。またボンドックやコーラン塾などの著名教師のもとに弟子が集まって形成する組織も基本的に地縁の性格をもたず、あくまで師と弟子という2人間の関係の集合体として成立し、それが一つの小宇宙をなしているのが特徴だという。こうした見方は評者もある程度著者達の意見に賛成できる。しかし不満はこうしたイスラムがなぜマレー農村社会構造の地縁の共同性や組織性を補強するように機能しないのかといった点に関する分析が欠落していることである。本書ではイスラムが地縁組織社会形成に積極的に機能しないのはもともとカンボンそれ自体に地縁組織としての性格が薄弱だということと関係していると簡単に述べているにすぎない。この点さらにくわしい分析がほしかった。

最後に血縁組織については双系制的原理による家族・親族組織が支配的でありマレー農民の社会的行動や価値意識の源泉の多くもここに求められるとしている。双系制原理の特徴については「家族の構造が相対的独立性の強い個人の諸関係の上に形づくられている」のが特徴であり、このことが均分相続による個人主義的所有観念とあいまち、個人中心の社会関係を成立せしめる大きな原因となりさらにマレー人の精神や行為の領域における支配的な価値感となっているとしている。またこうした個人主義の社会ではダイアディック(dyadic)な関係、つまり対人関係または二人関係が基本的な集団の結合原理として作用する結果、強固で安定的な組織や集団はなかなか形成されにくく、たとえ形成されても毀れやすく流動的なのが特徴であり、したがって個人は集団や組織への帰属感、従属感を強く保持することなく一つの集団から

他の集団への移動が抵抗なく行なわれるのが基礎的特徴であると説明している。

このように「プロローグ」と「エピローグ」では(1)村落社会構造の性格と特質、(2)宗教と慣習の実態と役割、(3)双系的な親族・家族組織に関する叙述から成り立っている。これら三つの要点については部分的にはすでに多少のコメントを加えてきたが、さらに評者と意見を異にするところもあるのでその点について触れておきたい。それはとくに(1)の村落社会の性格把握に関してである。前述のごとく本書の著者はマレー村落社会の構造的特質を日本の村落との対比で共同性、組織性、排他性の稀薄ないし欠如としてとらえ、そのよってきたるところを基本的にはマレー村落社会をとりまく「自然と水稲作の性格」に求めている。しかしながらマレー村落社会に対するこうした理解と評価の中からはマレー村落社会の形成という点でマレーシアの村落行政支配の歴史がこれまでどうかかわってきたかという視点が欠落してしまうのではなからうか。というのはイギリスに植民地支配される以前からマレー人為政者は支配のための物的基礎を主として王族による独占的な商業貿易と関税、鉱区使用料等に求め農業生産者からの租税には副次的にしか重きを置いていなかったからである。つまり農民は支配の対象ではあったが主たる貢納者ではなかったのである。したがって農民や農村は日本の場合と異なり諸々の行政的支配の枠組のなかにながらと組み込まれることなく、自然村としての性格をずっと維持してきたと見てよからう。とすれば本書のようなマレー農村社会の性格把握には異論はないにしても、そうした性格をもたらした要因はなにかという点において評者とは若干重点の置き方に相違がでてくることになる。結論的に言えばマレー農村の共同性、組織性、排他性の弱さの原因を探る場合、これまでマレー農村が為政者によってどのようにとらえられてきたかという歴史的視点からの接近をもう少し加えてほしかったというのが評者の率直な意見である。もちろん、こうした研究は資料も乏しく困難が予想されるがより精密なマレー農村像の確立のために欠かせない作業であらう。

最後に本書を積極的に推奨したい点についていえば、それは家族・親族組織に関する部分であろう。マレー農村に見られる双系制的家族・親族組織の特徴が豊富な事例で描きだされており資料としての価値を評価したい。

(調査研究部 堀井健三)